

令和 7 年度 大学等と地域が連携して取り組む地域課題解決プロジェクト
(ふるさとミライカレッジ)

ローカル線沿線地域を対象とした課題解決プロジェクト

成果報告書

令和 8 年 3 月

和歌山県

目次

1. プロジェクトの概要	1
1.1 背景	1
1.2 地域課題	1
1.3 プロジェクト及びフィールドワークの内容	1
1.4 目標とする地域の成果	2
2. プロジェクトの具体的成果	3
2.1 プロジェクトの成果サマリ	3
2.1.1 ビジョンの共有	3
2.1.2 主体形成	3
2.1.3 ネットワーク形成	3
2.1.4 学び・改善のプロセス	3
2.2 プロジェクトおよびフィールドワークの活動実績	4
2.2.1 和歌山県ふるさとミライカレッジ全体事業	4
2.2.2 空き家と耕作放棄地のデッドストックの利活用促進プロジェクト	5
2.2.3 みのしまラボ～地域とつながる14日間の協働まちづくりキャンパス～	6
2.2.4 ふるさとミライカレッジ in 湯浅町～地域と若者の絆プロジェクト	7
2.2.5 若者の視点を取り入れた「みかんの未利用資源」の販売促進プロジェクト	8
2.2.6 若者の視点を取り入れた SUSAMI LOCAL START UP プロジェクト	9
2.3 地域の成果と今後の展開	10
2.3.1 目標とする地域の成果に対する評価	10
2.3.2 今後の展開	11
3. プロジェクトの実施体制	12
3.1 プロジェクト体制の全体像	12
3.2 プロジェクト体制内の役割	12
4. スケジュール	14
5. プロジェクトを通じて得られた効果	15
5.1 地域における効果	15

5.1.1 プロジェクト前後の変化.....	15
5.1.2 得られた示唆.....	15
5.2 自治体における効果	16
5.2.1 プロジェクト前後の変化	16
5.2.2 得られた示唆	16
5.3 大学における効果	16
5.3.1 プロジェクト前後の変化	16
5.3.2 得られた示唆	17
5.4 学生における効果	17
5.4.1 プロジェクト前後の変化	17
5.4.2 得られた示唆	17

1. プロジェクトの概要

1.1 背景

- ・和歌山県の総人口は1985年の108.7万人をピークに減少に転じ、現在までの約40年で85%(約90万人)に減少しました。今後30年の減少スピードは、これまでの約2倍に加速し、2050年には58%(約63万人)にまで減少し(減少幅は全国7番目に大きい)、生産年齢人口(15歳～64歳)と高齢者人口(65歳以上)はほぼ同数となると予測されています。
- ・人口減少に伴う地域の担い手不足という傾向は避けられない中で、多様性に富んだ豊かな地域づくりを実現するためには、地域外からの意見、特に地域の固定観念に囚われない若者の意見を取り入れることが重要な鍵になると考えています。
- ・そこで、この度、大学生等の若者の視点を活かして取り組みたい地域課題解決プロジェクトを企画しました。

1.2 地域課題

- ・今回実施したプロジェクトでは、ローカル線沿線地域を対象とした地域課題に取り組みました。
ローカル線沿線地域を対象とした理由は、地域住民にとっては重要な移動手段であるとともに、和歌山県へ来訪する際の代表的な交通手段が電車であり、都市との運行間隔のギャップや車窓からの景観など地域での暮らしを想像できる機会になり、また、プロジェクトが終わっても活動地域をグループではなく個人でも訪問しやすいよう沿線地域を対象としました。
- ・プロジェクトは、①貴志川線沿線地域(和歌山市)、きのくに線沿線地域(②箕島地域 ③湯浅町 ④田辺地域 ⑤すさみ地域)と付番し、それぞれで取り組む地域課題は以下のとおりです。
 - ①全国ワースト2位の空き家率と農業の担い手不足による耕作放棄地の増加
 - ②若手人材の発掘やその人材の活動の受け皿となる場、地域内外の多世代の活発的な交流が課題
 - ③湯浅町の特産物・食材の発信力と若者を中心とした関係人口の持続的な創出
 - ④未利用資源であるみかんの皮の活用と、若者・消費者視点での発信を通じた農業活性化が課題
 - ⑤「消滅可能性都市」と懸念される地域における地域産業の縮小と人材・後継者不足

1.3 プロジェクト及びフィールドワークの内容

- ・学生には地域の特色ある産業等を体験し、多様性のある地域づくりや未利用資源の有効活用など地域課題への解決策を提案してもらいました。また、地域住民や地域づくり団体等との交流機会を設け、若者視点で魅力ある地域の維持や新たな魅力を見出すための意見交換も行いました。
- ・それぞれのプロジェクト及びフィールドワークの概要は以下のとおりです。
 - ①「空き家と耕作放棄地のデッドストックの利活用促進プロジェクト」と題し、空き家清掃やまち歩きヒアリング、農作業などの体験を通じて、地域のデッドストック利活用について提案します。
 - ②「みのしまラボ～地域とつながる14日間の協働まちづくりキャンパス～」と題し、地域住民と協力して屋台製作とチャレンジショップ運営、まち歩き調査を経たまちの将来ビジョンを提案します。

- ③「ふるさとミライカレッジ in 湯浅町～地域と若者の絆プロジェクト～」と題し、地域の特産に関わる産業体験と未利用資源を活用した商品開発、まちの魅力を伝えるプロモーションを行います。
- ④「若者の視点を取り入れた『みかんの未利用資源』の販売促進プロジェクト」と題し、生産者ヒアリング・農業体験などを通じて未利用資源の活用と地域農業の発信力向上を企画します。
- ⑤「若者の視点を取り入れた SUSAMI LOCAL START UP プロジェクト」と題し、学生の地域でやりたいことを応援し、地域での事業創出を提案します。

1.4 目標とする地域の成果

- ・地域に滞在し、その地域でしか体験できない活動や交流を経て、地域への関心と愛着を高め、プロジェクト終了後も関係人口として県内地域と繋がることを目標とし、別事業で構築予定の関係人口創出プラットフォーム「わかやま FUNBASE」の会員登録を目指しました。

2. プロジェクトの具体的成果

2.1 プロジェクトの成果サマリ

2.1.1 ビジョンの共有

大学(学生)側と地域側がそれぞれプロジェクトで取り組みたい地域課題やフィールドワークについて、コーディネーターが仲介・調整することで、お互いの方向性を決めていくことができました。

事例 観光学部の学生が観光業とは一見関連がない空き家活用や農作業の現場を体験し、率直に感じたことを話し合うことで、地域側において、改めて地域の魅力と課題への理解を深めるきっかけとなりました。

2.1.2 主体形成

フィールドワークにおいて現地の関係者と協働してプロジェクトに取り組むなかで、学生が自ら考え、判断し、行動する機会が生まれた。地域課題を自分ごととして捉えるようになり、今後も参加した地域に関与しようとする意志を醸成できました。

事例 あるプロジェクトに参加した学生11名中8名が今年度と同様にしっかりと継続的に地域と関わりたいと回答。

2.1.3 ネットワーク形成

従前の組織に、プロジェクトを通じて、域外の大学生が参画することで、関係者に刺激を与え、共創環境が強化されました。

事例 これまで、地域づくりに取り組む団体として、まちづくり会社が旗振り役となって、行政や商工会議所・民間企業、観光協会、大学教員(アドバイザー的立ち位置)で構成されていた団体に、今回のプロジェクトで「風の人」として学生が参画することで、行政や民間企業の連携・共創環境が強化されました。

2.1.4 学び・改善のプロセス

約10か月の長期プロジェクトであったため、仮説と実践を往復するプロセスに取り組むことができました。また、現地活動の最終日には学生による地域側へ対する仮説・実践の振り返り会が行われ、うまくいった点と改善すべき点を整理できました。

事例 経営学部の学生が、地域側と当初想定していた顧客ターゲットである外国人観光客に対して、ヒアリング等を実施するなかで、消費者ニーズとのズレを明らかにし、顧客ターゲットを変更する必要性を提案し、プロジェクトの方向性を再構築できました。

2.2 プロジェクトおよびフィールドワークの活動実績

2.2.1 和歌山県ふるさとミライカレッジ全体事業

(1) プロジェクトおよびフィールドワークの活動内容

1) 目的

県内5地域で実施するプロジェクトを効果的に遂行するため、コーディネーターの設置と全体会議を開催しました。

2) 活動方法・内容

- ・各プロジェクトにコーディネーターを設置し、地域側と学生間の連絡調整や意見集約、現地でのフィールドワークが円滑に実施できるよう支援しました。
- ・全体会議(キックオフ研修、中間研修、最終報告会)を開催し、各地域の関係者が相互に学びあう機会や交流機会を設けました。

3) 活動の工夫点

- ・各地域の実情に詳しく、ノウハウを持ったキーパーソンをコーディネーターに任命しました。
- ・全体会議においては、各地域の情報交換のほか、キックオフ研修と中間研修では外部講師(NPO法人エティック伊藤氏、(一社)フィッシャーマンジャパン松本氏)を招き、学生受入にかかるプロジェクト設計方法や持続的な伴走支援の構築を学び、最終報告会では学生を交えた交流機会を設けました。

(2) プロジェクトおよびフィールドワークの活動結果



7月9日キックオフ研修会
47名参加(オンライン含む)



11月17日中間研修会
33名参加(オンライン含む)



2月16日最終報告会
56名参加(オンライン含む)

(3) プロジェクトおよびフィールドワークの成果

- ・コーディネーターによる創意工夫が、各地域のプロジェクトの遂行と学生との継続的な関係性に寄与しました。
- ・全体会議を開催することで、各地域の関係者(行政、コーディネーター、大学)が情報交換やお互いの手法を学びあうことができ、さらに、プロジェクト後の地域づくりの方向性を考える一助になりました。

2.2.2 空き家と耕作放棄地のデッドストックの利活用促進プロジェクト

(1) プロジェクトおよびフィールドワークの活動内容

1) 目的

全国ワースト2位の空き家率と農業の担い手不足による耕作放棄地の増加という地域課題に対し、空き家を活用したアルベルゴディフーズ構想案やアグリツーリズムプランの提案を目指します。

2) 活動方法・内容

- ・空き家の残置物撤去や周辺まち歩き調査、ヒアリングを通じて、空き家を起点としたエリアの活性化策を提案しました。
- ・地域の援農・農作業体験の現場を実体験し、アグリツーリズムのツアー企画書の作成に取り組みしました。

3) 活動の工夫点

- ・観光学部の正課科目として単位認定されたので、大学側と評価基準など丁寧に調整しました。
- ・学生の国籍が日本2名、ベトナム4名、中国2名と多国籍で、言語のほかに文化の違いもあるため、現地活動で地域の事業者と協働する際は、事前に密な調整や導入に時間を掛けました。

(2) プロジェクトおよびフィールドワークの活動結果

①令和7年9月7日(日)～13日(土)の7日間

空き家の清掃、周辺地域のまち歩きやヒアリングを通じて、住民や観光客ニーズや解決策の模索

②令和8年2月4日(水)～9日(月)の6日間

周辺地域の農家に滞在、実際に農作業を手伝い、①の活動も含めてエリア活性化について提案



(①写真) 空き家の清掃と外国人観光客ヒアリング

(②写真) 柿の枝剪定作業と農家の方と夕食会
(自国の料理を紹介)

(3) プロジェクトおよびフィールドワークの成果

- ・大学の授業では繋がるのが難しい農家の方々や地域住民との交流を通じて、学生自身、今後のキャリアを考える上で貴重な経験となりました。
- ・継続的な地域の農業・援農体験プログラムへの参加や、来年度以降の大学側でのカリキュラムの設定など、今後も大阪観光大学の学生が関係人口として継続的に地域と関わるきっかけになりました。

2.2.3 みのしまラボ～地域とつながる14日間の協働まちづくりキャンパス～

(1) プロジェクトおよびフィールドワークの活動内容

1) 目的

地域の賑わいづくりのきっかけとしての屋台製作・運営と調査分析、まちづくりビジョン策定の活動を通じて、若者の視点やアイデアを活かした多様性のあるまちづくり活動の場づくりを目指します。

2) 活動方法・内容

- ・地域の関係者(建設会社、協力隊、住民)と協働し屋台を製作し、チャレンジショップを運営しました。
- ・まち歩き調査を通じて、地域の賑わいや人々の動線等、まちのポテンシャルを調査分析しました。
- ・地域の持続的なまちづくり推進のため将来ビジョンを3グループに分かれて策定しました。

3) 活動の工夫点

- ・実践・調査・ビジョン編という流れで、地域側との協働作業(実践編)から入ることで、早い段階で関係者・学生間の密な関係性が構築されました。
- ・学生が自ら活動内容(スケジュール)を決める機会を提供し、プロジェクトを「自分ごと」と捉えるよう促しました。

(2) プロジェクトおよびフィールドワークの活動結果

- ①【実践編】7/27～28、9/4～5、9/17～9/18 の6日間 屋台製作・運営
- ②【調査編】10/17、11/23、11/26～27、12/6～7、12/13 から学生が3日間選択 まち歩き調査等
- ③【ビジョン編】12/10～12、1/22～23 の5日間 ビジョン策定合宿とプレゼン発表会



(①写真)屋台の製作



(②写真)まち歩き調査



(③写真)ビジョン合宿



(③写真)市長へプレゼン

(3) プロジェクトおよびフィールドワークの成果

- ・市長へのプレゼンの結果、学生の提案の一部が早くも実施されました。
- ・地域での評価が高く、本プロジェクトが学生(関係人口)受入オリジナルモデルとして構築されました。
- ・学生が「自分ごと」として活動に取り組み、地域への愛着やわがまち化が生まれました。この効果は学生のみならず、地域側のシビックプライド醸成にも寄与しました。

2.2.4 ふるさとミライカレッジ in 湯浅町～地域と若者の絆プロジェクト

(1) プロジェクトおよびフィールドワークの活動内容

1) 目的

地域の特産や魅力について、体験を通じて若者に伝え、商品開発やイベント等での情報発信に取り組むことで、地域理解や継続的な関わりを生み出し、将来的な地域活性化と担い手育成を目指します。

2) 活動方法・内容

- ・町職員や小学生からの聞き取りや地域産業等の実体験を通じて、地域の文化・産業・魅力について体験的に学びました。
- ・学内(講義)での検討や試作を繰り返し、摘果みかん(未利用資源)を活用した商品を開発しました。
- ・活動で得た学びや地域の魅力を発信することを目的に、地域での取材を経て PR 動画を製作しました。

3) 活動の工夫点

- ・学部横断の正課科目として単位認定されたので、大学側と丁寧に調整しました。
- ・商品開発等は学内(講義)で集中的に検討・試作を重ね、現地活動の大半を地域の産業や魅力を知る＋試作 PR の機会としました。

(2) プロジェクトおよびフィールドワークの活動結果

- ①(導入)8/12、20 の2日間 キックオフレクチャー、小学生との地域交流
- ②(体験)8/26、29、30、31、9/1、3、4、7、10/12、31 の10日間 地域の文化・農業・産業体験
- ③(PR)10/26、12/6 の2日間 取材や地域まつりでの試飲プロモーション



(①写真)小学生との交流 (②写真)摘果みかん収穫 (②写真)商品試作完成 (③写真)地域まつりで PR

(3) プロジェクトおよびフィールドワークの成果

- ・活動後半でフードチームとプロモーションチームに分かれ、それぞれ摘果みかん商品開発と地域の魅力を伝える PR 動画制作に取り組み、プロジェクト期間内に完成させました。
- ・プロジェクト終了後も町のアンテナショップ(大阪市内)で試作品の PR を行うなど、関係性が継続しています。

2.2.5 若者の視点を取り入れた「みかんの未利用資源」の販売促進プロジェクト

(1) プロジェクトおよびフィールドワークの活動内容

1) 目的

大学と地域の事業者と連携し、農作物の未利用資源を起点に、経営学(マーケティング)を学ぶ学生の実践的な学びと地域のファンづくりを同時に実現することを目指しました。

2) 活動方法・内容

- ・未利用資源である柑橘の残渣を活用した商品開発に取り組むほか、地域の事業者が販路に課題を抱えていた商品・セット企画についてヒアリング調査等を経て、よりニーズに合った方向性を提案した。
- ・活動の集大成として、学生提案のポップアップイベントを開催し、学生自身が来場者に対して、地域の魅力や柑橘の香り・食べ比べ(違い)などを伝え、「体験型の魅力発信」を実施しました。

3) 活動の工夫点

- ・経営学部の子課程科目として単位認定されたので、大学側と丁寧に調整し、講義による基礎理解と段階的な現地実践を組み合わせた構成としました。
- ・自身の活動の主たるテーマを学生各々で決めて取り組み、より主体的に取り組むよう企画しました。

(2) プロジェクトおよびフィールドワークの活動結果

- ①5/23～26 の4日間 地域の農産業・魅力を知る
 - ②6/26～30、8/29～30 の7日間 若手農家インタビューと取材記事 note・X 発信、商品開発
 - ③9/7～12、11/12～14、12/9～12 の13日間 商品企画、ポップアップ企画の提案と準備
 - ④1/16～17 の2日間 ※現地活動ではない 学生提案ポップアップイベントの実施
- ※現地活動は①～③のうち14日間 学生それぞれのタイミングで来訪。



(①写真)加工現場視察 (②写真)中間発表・提案 (③写真)商品試作完成 (④写真)柑橘の香り体験

(3) プロジェクトおよびフィールドワークの成果

- ・大学での学びを地域の現場で実践し、学生が「学ぶ側」から「動かす側」へと意識と行動を転換させる経験を生み出しました。
- ・地域側にとっても、顧客が高齢化するなか、若者視点を取り入れる機会となり、「次につながる試行」を実証することができました。

2.2.6 若者の視点を取り入れた SUSAMI LOCAL START UP プロジェクト

(1) プロジェクトおよびフィールドワークの活動内容

1) 目的

地域課題や活性化を目的とせず、自己中心的に地域と関わる活動を学生に取り組んでもらい、「自分らしく」、「自分ごと」で自然と地域住民・事業者と共創して、まちづくりに参画することを目指しました。

2) 活動方法・内容

漁業、ゲストハウス運営、親子留学受け入れ体験、未利用資源の商品開発、ツアー開発など学生が地域で取り組みたいことに沿った地域のキーパーソンを紹介～企画・実践まで活動を支援しました。

3) 活動の工夫点

- ・学生個人と地域住民・事業者の1対1の体験交流の機会(地域の案内、自然遊び、釣り同行、地域の祭事のお手伝い等)を設けて、学生がより地域に溶け込める土壌を整えました。
- ・地域で取り組みたいテーマ設定から実践まで学生が自ら主導権をもって進め、挑戦と失敗を支える環境を町職員とコーディネーターが整えました。

(2) プロジェクトおよびフィールドワークの活動結果

令和7年7月～令和8年2月のうち、14日間以上の現地活動を学生の意向を踏まえ設定しました。

学生9名のうち、3名の取組を以下のとおり報告します。

①未利用魚シイラ・オキザワを活用した商品開発(15 日間)

→漁業体験や地域交流を経て、学生自身のスキルを活かし未利用魚の練物製品を企画開発した。



②地域資源を活用した新たな体験型観光の企画実践(18 日間)

→自然遊びや地域交流を経て、自然体験×デジタルデトックスツアーを企画・実践した。



③地域資源を活用した子ども向けワークショップの企画実践(15 日間)

→地域交流を経て、地域資源の貝やシーグラスをカタチにするアクセサリー教室を企画・実践した。



(3) プロジェクトおよびフィールドワークの成果

- ・学生9名とも現地活動14日を超える日数(平均16.6日、最長19日)滞在し、地域での活動を主体的に楽しんで取り組み、プロジェクト終了後も当該地域と継続的に関わっていくという声があがっています。
- ・学生考案の商品やツアー、ワークショップ企画について、事業期間内に3件実践しました。

2.3 地域の成果と今後の展開

2.3.1 目標とする地域の成果に対する評価

- ・地域に滞在し、その地域でしか体験できない活動や交流を経て、地域への関心と愛着を高め、プロジェクト終了後も関係人口として県内地域と繋がることを目指しました。
- ・5地域のプロジェクトに参加した学生41名にアンケートを実施したところ回答者(26名)のうち、今後も関わった地域や他の和歌山の地域と関わりたい割合は平均 4.65(5段階)と高い割合でありました。

ふるさとミライカレッジに参加した学生へのアンケート結果	
各地域のプロジェクトに参加した学生 41 名にアンケートを実施しました。(26 名回答)	
質問	回答
和歌山訪問歴	訪れたことがない 5、訪れたことがある 15、和歌山出身 6
プロジェクト参加満足度	平均 4.73 (5 段階)
上記理由 (抜粋)	・ 普段の授業では学べないことをたくさん知ることができた。 ・ (プロジェクトに参加して) 自分の強み弱みを見つけることができた。 ・ 地域が求めている学生の視点というものが抽象的で戸惑った。
地域・コーディネーター満足度	平均 4.58 (5 段階)
上記理由 (抜粋)	・ 現地の大人達との間を取り持って、円滑にコミュニケーションできた。 ・ 学生の意見を肯定して、地域でのサポート、理解を深める機会をくれた。 ・ 課題がより詳細であれば、活動方針の決定やモチベーション維持ができたと思う。
参加前後で意識の変化・学び	・ 知らなかった町が自分にとってのなじみのある、大好きな場所になった。 ・ 新しいものや外部の人間を受け入れる地域だと知り、非常に新鮮でした。
地域・和歌山と関わりたい割合	平均 4.65 (5 段階)
その他・感想 (抜粋)	・ 大学外で色々な人と交流する機会を頂いたことで大学生活も楽しくなった。 ・ 個人的に地域を訪れて、現地の方々とお話したいです。 ・ これで終わるのも悲しいため、今後も地域と関わっていきたいです。

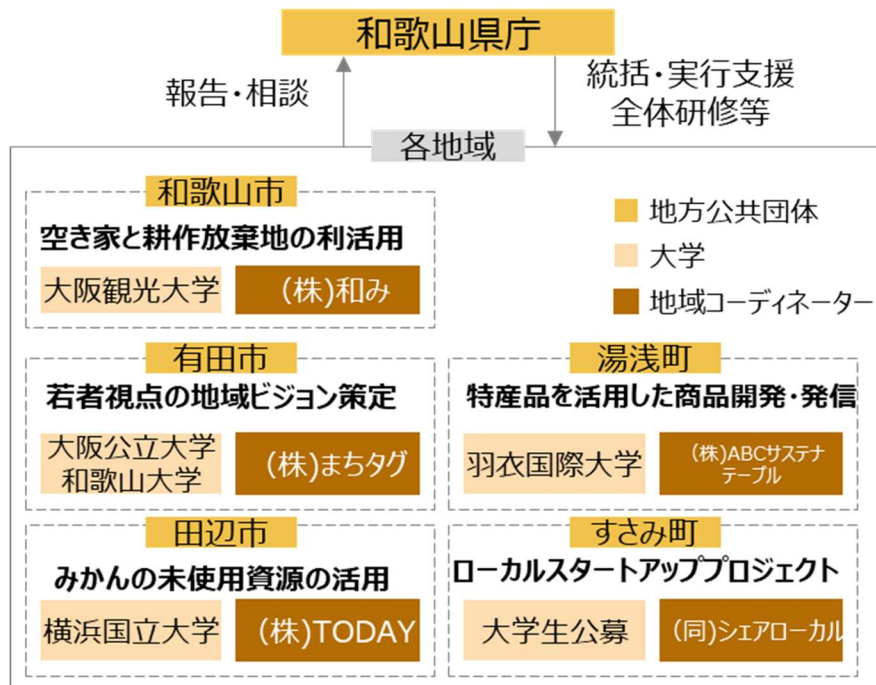
目標とする地域の成果(実施計画書)	達成状況・結果評価
プロジェクト参加学生のうち、8割の「わかやまFUNBASE」への会員登録を目指す。	△ 2月末時点で2名の登録が確認できました。全体会議や各地域のコーディネーターを通じて周知は行ったが、登録(個人情報の入力等)の心理的ハードルがあったと思われます。コーディネーターを中心とした各地域のコミュニティ(LINE グループ、slack)への登録はされているので、今後も継続して、会員登録を呼びかけていきます。
空き家を活用したアルペルゴディフーズ構想案の作成とアグリツーリズムプランの作成	○ 学生8名が各々、空き家や援農をテーマに地域活性化・活用案を提案しました。
大学生と地域が連携し、若者の視点を活かした参入しやすく多様性のあるまちづくり活動の推進	○ 若者のアイデアが実施される(予定含む)など、次年度以降のまちづくり活動に繋がっています。
特産物や食材を利用した商品開発により地域の魅力発信を強化し、地域と若者との持続的なつながりを創出	○ 摘果みかんを活用した商品開発と地域の魅力を伝える動画が出来上がりました。次年度以降も摘果みかんを活用した新たな商品開発を検討しています。
若者視点やアイデアを活かした未利用資源の活用と認知度向上	○ 未利用資源を活用した商品開発から販路提案、首都圏での認知度向上イベントなど幅広く取り組みました。
新規ローカルゼブラ企業の起業と学生の拠点整備	△ 起業までは至らないものの学生企画のイベント(ツアー)開催など実施することができました。

2.3.2 今後の展開

- ・今後も和歌山県の地域プレイヤーやプロジェクトと繋がり続けられるようオンライン関係人口創出プラットフォーム「わかやま FUNBASE」への会員登録を促します。(1月20日開設)
- ・今年度より、ふるさと和歌山応援寄附(事業特定型)※ふるさと納税 にて、使途「大学生等による和歌山県内での地域貢献活動の推進」を追加し、募集を開始したところです。来年度は今年度の寄附金を活用し、学生等の地域活動を支援する予定です。

3. プロジェクトの実施体制

3.1 プロジェクト体制の全体像



3.2 プロジェクト体制内の役割

所属/氏名	本プロジェクトにおける役割
自治体	
和歌山県 地域振興課 中嶋真紀子	全体統括
和歌山県 地域振興課 塩崎美希	企画・調整 主担当
和歌山県 地域振興課 林 誠也	企画・調整 副担当
和歌山市 耐震・空き家対策課 中村	プロジェクト① 助言
有田振興局 地域づくり課 佐々木洋輔	プロジェクト② 企画・運営
湯浅町 ふるさと振興課 竹井一人	プロジェクト③ 講義
湯浅町 ふるさと振興課 田伏千晶	プロジェクト③ 調整
すさみ町 地域未来課 水上力仁	プロジェクト⑤ 企画・運営
大学高等教育機関	
大阪観光大学 観光学部 小野田金司 先生	プロジェクト① 学生調整・助言・評価
大阪観光大学 特務プロジェクト室 佐藤智子	プロジェクト① 学生調整
大阪公立大学 都市計画研究室 嘉名光市 先生	プロジェクト② 学生調整・助言
和歌山大学 システム工学部 佐久間康富 先生	プロジェクト② 学生調整・助言
和歌山大学 観光学部 永瀬節治 先生	プロジェクト② 学生調整・助言

羽衣国際大学 共通教育開発センター 清水明男	プロジェクト③ 全体統括
羽衣国際大学 共通教育開発センター 吉田智一	プロジェクト③ 統括補佐
羽衣国際大学 共通教育開発センター 中嶋希々	プロジェクト③ 事務経理
羽衣国際大学 共通教育開発センター 西田由香	プロジェクト③ 事務経理
羽衣国際大学 学術情報・地域連携課 松藤貴久	プロジェクト③ 現地活動調整
羽衣国際大学 人間生活学部 金岡有奈 先生	プロジェクト③ 学生調整・助言・評価
羽衣国際大学 人間生活学部 李 温九 先生	プロジェクト③ 学生調整・助言・評価
羽衣国際大学 現代社会学部 北波英幸 先生	プロジェクト③ 学生調整・助言・評価
横浜国立大学 経営学部 伊藤淳司 先生	プロジェクト④ 学生調整・助言・評価
学生団体	
該当なし	
コーディネーター	
株式会社和み 地域活性化事業部 永田大樹	プロジェクト① 企画・調整・運営
株式会社まちタグ 代表 小川愛哉	プロジェクト② 企画・調整・運営
株式会社 ABC サステナテーブル 代表 本間智也	プロジェクト③ 助言
株式会社 TODAY 代表 山田かな子	全体・プロジェクト④ 企画・調整・運営
合同会社シェアローカル 代表社員 源口葉月	プロジェクト⑤ 企画・調整・運営
プロジェクト参加学生	
大阪観光大学 観光学部 8名	プロジェクト① 参画
大阪公立大学 大学院 4名(うち1名は大学負担)	プロジェクト② 参画
和歌山大学 観光学部・大学院・システム工学部 7名 (うち1名は大学負担)	プロジェクト② 参画
羽衣国際大学 人間生活学部・現代社会学部 9名	プロジェクト③ 参画
横浜国立大学 経営学部 4名	プロジェクト④ 参画
大学生公募(和歌山大学1、京都産業大学5、神戸大学1、 龍谷大学1、東京経済大学1) 9名	プロジェクト⑤ 参画

4. スケジュール

実施時期	活動実績(全体事業)
2025年5月	・総務省と委託契約を締結 ・各地域プロジェクト実施にかかる委託契約を締結 ・各地域コーディネーターに企画調整・伴走支援を依頼 ・現地活動の進捗確認(現地活動に同行)
2025年6月	・全体コーディネーターと県主催の全体会議の開催準備 ・各地域プロジェクトの企画調整
2025年7月	・県主催の全体キックオフ研修会の開催(7/9) ・各地域プロジェクトの企画調整 ・現地活動の進捗確認(現地活動に同行) ・現地活動の取材(県広報番組用)
2025年8月	・県広報番組の原稿修正・職員インタビュー ・現地活動の進捗確認(現地活動に同行)
2025年9月	・県広報番組で「和歌山県ふるさとミライカレッジ」概要放送(9/14) ・現地活動の進捗確認(現地活動に同行) ・総務省主催の全体会議(相互学習会)に参加
2025年10月	・全体コーディネーターと県主催の全体会議の開催準備
2025年11月	・県主催の中間報告会、研修会の開催(11/17) ・現地活動の進捗確認・経費状況確認
2025年12月	・総務省主催の全体会議(中間研修会)に参加 ・現地活動の進捗確認(現地活動に同行) ・現地活動の取材(県広報番組用)
2026年1月	・全体コーディネーターと県主催の全体会議の開催準備 ・現地活動の進捗確認(現地活動に同行)
2026年2月	・県主催の最終報告会の開催(2/16) ・支払手続
2026年3月	・総務省主催の全体会議(最終報告会)に参加

※各地域のスケジュールは「2.2 プロジェクトおよびフィールドワークの活動実績」を参照

5. プロジェクトを通じて得られた効果

5.1 地域における効果

5.1.1 プロジェクト前後の変化

- ・ 和歌山県は 1985 年をピークに人口減少が加速し、生産年齢人口の激減による深刻な担い手不足や、全国ワースト 2 位の空き家率、農業における耕作放棄地の増加といった停滞要因を抱えていました。これらの課題に対し、従来の移住定住施策だけでは不十分であり、固定観念に囚われない若者など「地域外からの視点」を取り入れることが重要だと議論されていました。
- ・ 地域外の大学生が前向きに地域課題に取り組む姿を見て、学生の活動の輪が地域に広がっていくことを期待して、「地域外の大学生が取り組んでいる活動に自分も協力していきたい」と連携・参画する機運が地域住民・事業者等の中で高まりました。さらに、これまで地域課題に対しては行政や一部の関係者が中心となっていたものが、本プロジェクトを契機に、一般住民や事業者においても「自分ごと」として関わろうとする意識変化が見られ、地域全体で課題解決に取り組む雰囲気醸成されました。
- ・ 活動地域の出身ではない若者が自身の地域の課題に取り組む姿を見て、これからの地域がどう変化していくか、学生が提案した来年度以降の取組にもワクワクしているという住民の声が聞かれました。加えて、人口減少や担い手不足、空き家の増加など、これまで長年解決が難しかった課題に対しても、「新しい視点であれば突破口が見えるのではないか」という前向きな期待感が生まれました。
- ・ また、地域外の大学生が「風の人」として参画したことで、これまで固定化しがちであった地域内の関係性に変化が生じ、行政、事業者、住民の間に新たな対話や協働の機会が創出されました。その結果、空き家の利活用提案や地域資源を活かした企画など、従来は検討段階にとどまっていた取組が、実証や具体的な行動へと発展するなど、地域における実践的な動きが生まれました。

5.1.2 得られた示唆

- ・ 地域外の大学生がもたらす外部からの視点や地域独自の価値の再発見によって、地域の方々に良い刺激を与え、学生活動が、地域住民自らが担う地域づくりの推進にも貢献できることが示唆されました。特に、地域にとって当たり前で見過ごされていた資源や文化が、学生の視点を通じて新たな価値として再認識される場面が多く見られ、地域の誇りや愛着の醸成にもつながりました。
- ・ また、座学や会議中心の関係構築ではなく、屋台づくりや農作業など、地域住民と学生が共に体を動かす実践活動から関係を築くことで、短期間で信頼関係が形成され、その後の議論や協働が円滑に進むことが明らかとなりました。このような「実践起点」のアプローチが、地域と外部人材の関係構築において有効であると考えられます。
- ・ 今後同様の取組を進めるにあたっては、外部人材の挑戦や試行錯誤を受け入れる寛容性や、それを支える受入体制の整備が不可欠であり、これらが地域づくりの持続的な推進力を生み出す重要

な要素であることが示唆されました。

5.2 自治体における効果

5.2.1 プロジェクト前後の変化

- ・ 約10か月の長期プログラムのため、学生の途中離脱や現地活動中のモチベーション維持が課題で、大学の正課科目として単位認定してもらうことが効果的と考えていました。しかし実際には、地域の受入体制や関係者の関わり方次第で、単位認定の有無に関わらず学生の主体的な関与が維持されることが確認されました。
- ・ プログラムを終えての所感、地域の関係者や受入環境、コーディネーターの工夫次第で、正課科目かどうかに関わらず、地域と大学生の密な関係性が構築できました。特に、学生一人ひとりに対して丁寧に向き合う姿勢や、日常的なコミュニケーションの積み重ねが、関係性の質を高める上で重要であることが明らかとなりました。
- ・ また、自治体内部においても、関係人口創出のあり方に関する理解が深まり、「イベント型の関係構築」から「継続的な関係性の構築」へと意識が変化しました。さらに、一部のプロジェクトでは学生の提案が施策として具体化されるなど、若者の視点を政策に取り入れる新たな可能性も見出されました。

5.2.2 得られた示唆

- ・ 最終目標は、プロジェクト終了後も地域と大学生が継続的な関係性を築くことであります。そのため、地域外の大学生がプロジェクトを通じて「積極的に(自分ごととして)地域と関わりを持ちたい」と考えるきっかけとして、受入地域の体制や環境が非常に重要な要因であることが示唆されました。特に、現地活動中に自分のアイデアを気軽に相談でき、助言や応援してくれるコーディネーターや行政職員が配置されていると、学生の取組への積極的な姿勢に効果的でした。
- ・ また、単発の取組で終わらせないためには、オンラインプラットフォーム等を活用した継続的な接点づくりや、プロジェクト終了後も関係を維持できる仕組みの構築が重要であることが明らかとなりました。
- ・ 加えて、事業の持続性を確保するためには、財源の多様化や外部資金の活用など、体制面・資金面の両面から支える仕組みづくりが不可欠であることが示唆されました。

5.3 大学における効果

5.3.1 プロジェクト前後の変化

- ・ 活動地域に縁もゆかりもない大学生にとって、地方の地域課題に直接触れ、試行錯誤を通じて課題解決に向けた実践的な学びを得る貴重な機会となった、と評価いただきました。また、地域の多

様な関係者との協働を通じて、学生の主体性やコミュニケーション能力が育まれたという声も聞かれました。さらに、教室内の理論学習だけでは得られない「現場での意思決定」や「仮説と検証の往復」を経験することで、学びの理解がより深まったとの評価も得られました。

- ・ 加えて、異なる文化や価値観を持つ地域住民との対話や協働を通じて、多様性への理解や柔軟な思考力が養われるなど、教育的な波及効果も確認されました。

5.3.2 得られた示唆

- ・ 今後の継続にあたって、年数を重ねると、地域がより高い水準を大学生に期待していく中で、学生は毎年参加者が入れ替わるなど、相互のズレが、学生活動の受け入れの課題になります。そのため、地域づくりの活動範囲を広げる契機となるような「関わり代」を学生に担ってもらうという受け入れ方であれば、毎年「新人」が来ても良い循環になるのでは、という手法が提起されました。
- ・ また、大学と地域の双方が期待値や役割を事前に共有し、無理のない形で協働関係を構築することが、継続的な取組の質を高める上で重要であることが示唆されました。

5.4 学生における効果

5.4.1 プロジェクト前後の変化

- ・ 地域活性化＝経済効果や集客数といった数字の面で捉えていた学生も現地活動を通じて、地域を盛り上げるとは、単に新しいものを作るのではなく、すでにある魅力や歴史を掘り起こし、それを面白い感性を磨くことだと考察する学生もあり、学生各々が現地活動を通じて、学んだこと、感じたことが多様な印象を受けました。さらに、地域住民との日常的な交流を通じて、地域に対する愛着や当事者意識が醸成され、「自分ごと」として地域課題に向き合う姿勢が育まれました。
(参考)和歌山県ふるさとミライカレッジ参加学生アンケートを添付します。
- ・ また、「知らなかった地域が好きになった」「また関わりたい」といった声も多く聞かれ、単なる学習機会にとどまらず、人生観や価値観に影響を与える経験となりました。

5.4.2 得られた示唆

- ・ 初めて訪れる地域で、学生が自分なりの考えやアイデアを持つには、受け入れる地域がどんな体験を学生に提供し、地域への理解や愛着を深める機会を創出できたかが重要であることが示唆されました。特に、学生に裁量を与え、自ら考え行動する機会を確保するとともに、その挑戦や試行錯誤を地域が受け入れ支援する環境が、学びの質を高める上で重要であることが明らかとなりました。
- ・ また、地域住民との密な交流や長期滞在といった体験の質が、関係人口としての継続的な関与意欲を高める重要な要因であることが示唆されました。

令和 7 年度大学等と地域が連携して取り組む地域課題解決プロジェクト(ふるさとミライカレッジ)
成果報告書

〔プロジェクト名〕 ローカル線沿線地域を対象とした課題解決プロジェクト

令和8年3月13 日

和歌山県
